



## 中国農具研究の視座 農業考古学から民具研究へ 周星 ZHOU Xing

農耕文明の国と言われる中国では、古くから、集約農業を特徴とした高度な農業技術が発達し、それに合わせて様々な農具も発明された。20世紀50年代以来、中国の農具研究において、特に「農業考古学」は大きな実績と発展を成し遂げてきた。大規模な社会主義の建設運動に伴って、考古学の発掘が繰り返され、多大な成果を収めた。その中には、青銅器・陶磁器・玉器などといった輝かしい「宝物」がある一方で、芸術性や鑑賞性に乏しい、素朴な農具や農業関係の資料が出土されているが、それらを軽視する傾向が少なからず存在した。そのため、陳文華教授をはじめとする一部の考古学者は、農具と農業関係の考古学資料に注目し、「農業考古学」という学問分野を作り出して研究活動を進めてきた。彼らの活躍によって、1981年に『農業考古』雑誌が創刊されたり、中国農業考古研究センターも設けられた。以来25年間で、農具関係の資料と研究論文が多く掲載されるようになり、その結果として、農耕文明を支えてきた農具体系の形成過程は、ほぼ明らかになったといえよう。

農業考古学の研究対象の範囲は、農作物の遺物・遺痕、動物（家畜）の骨や模型、農具、農地や田んぼの模型、農作図など様々で幅広い。農具はその中の重要項目になるが、全てではない。農業考古学の代表的研究成果として、1994年に刊行された陳文華教授著『中国農業考古図録』が挙げられる。この図録には、1700枚の写真が収められ、古代農業の輪郭や農業考古学の主要な成果も総括的に紹介される。古代農具の使い方などについて説明するためには、少数民族が住む周辺地域や奥地の田舎で、現在でもまだ使われている同じ農具か、あるいは類似のものが比較の対象として取り上げられたケースがしばしばある。これは典型的な「民族考古学」の方法である。

農業考古学で取り扱われる古い農具や歴史文献に記載される伝統農具と、田舎と僻地において現在でも使われている農具の間には、一種の「連続性」が存在する。つまり、農業考古学の「古代志向」に対して、「現実志向」の民具研究も中国にとって必要なのである。農具研究のキーワードは「生産」であり、民具研究のキーワードは「生活」全般である。従って、農業考古学から民具研究への発展は、視野と研究のパラダイムの転換が避けられないという考え方である。

今の中国では、農具の民具学的研究はまだ本格的に始まっていない。「民具」という学術用語さえ、ごく最近、日本からの紹介により、関係学界で使われ始めたが、定着するまでは時間が掛かるようである。中国民俗学の分野において、民具研究に近い研究成果が見られるようになりつつあるが、「民具の宝庫」と呼ばれる中国にとっては、まだ十分とは言えない状態である。これから、隣の中国においても、学問としての民具研究の時代がやって来るのではないかと信じている。



写真1

東(後)漢画像磚：踏碓(四川省彭縣出土)



写真2

東(後)漢陶模型：風車・踏碓(河南省洛陽出土)